

道 中 理

令和7年(2025)年7月2日

第192号

北海道中学校理科教育研究会



第72回全国中学校理科教育研究会北海道大会と私たち

北海道中学校理科教育研究会 会長 古川 恵美子

5月19日(月)、全国中学校理科教育研究会期首役員会が、棚内田洋行ユビキタス協創広場CANVAS東京で行われました。会場の白い壁は5つのスクリーンとして活用され、Webでの参加者や説明資料が映し出される中、会議が進められました。民間企業と公立学校の施設の差を目の当たりにしました。

北海道ブロックを代表して三浦 雅美前会長、野田 隆之事務局長と3人で出席し、8月の北海道大会のコンセプトや準備状況を説明し、大会宣言案の承認をいただきました。三浦前会長は、全中理副会長として、10年に一度の東京大会よりも7、8年に一度の北海道大会の方が開催頻度は高く、他ブロックとは異なり1ブロック1道の北海道には大会運営のノウハウが引き継がれており、毎回新しいチャレンジをして引き継いでいくのが北海道の役目であると、閉会挨拶を締めくくりました。役員や顧問からは、継続と変革に大きな期待の声をいただきました。全国からの期待にオール北海道で応えましょう。

前回の北海道大会において全国で初めて行われた「若い理科教師の集い」は、東京大会でも行われましたが、40代以上の方の参加を認めたがために私たちが目指している会とは異なるものとなっていました。役員会ではこのことも説明し、見たい気持ちは理解できるが、参加した若い教師から話を聴くことにとどめるよう各ブロックでの趣旨説明を依頼しました。道中理ユースネットが結成されてから20年、安心して発言できる場で、自ら見付けた課題に向き合い、他者の知恵も借りつつ、切磋琢磨して解決していく、使える(ユーズ)技

とネットワークをもつ理科教師となりました。子どもの探究心を育てることができる探究心のある理科教師が、どのように運営し、どのような発表を行い、どのような学びを得たのか、若い教師から聴かせてもらえることを私も楽しみにしています。

また、前回の北海道大会では、事前作成が可能な速報1、2号のみを印刷袋詰めし、大会当日の内容を伝える3号以降の速報はHPへの掲載としました。昨年度の道中理函館大会では、当日資料をデジタル配信とし、校内にWi-Fi環境を設置しました。今回の北海道大会は、大会誌、記念誌、当日資料、速報のデジタル配信を行うこととします。(大会誌は必要数のみ印刷・製本もします。)HPや配信方法の検討、会場ネットワーク環境の整備、そして、研究者を守るセキュリティーや著作権についても熟慮して進めています。今大会の実務担当の中心は、ユースネット経験世代です。次代を担う教員が確実に成長していることを嬉しく、頼もしく思います。

今回の北海道大会でも、今までどおり、理科教育について真摯に語り合い学びあい、子どもの姿が見える会であることが大切です。オール北海道で全国各地から理科教師の皆様をお迎えし、来てよかった、また来たいと感じていただける会にするのはもちろんですが、今、皆様の目の前にいる子どもたちから、今日の授業はよく分かった、できるようになった、楽しかった、今度は〇〇について探究してみたいという声が聞こえてくるように、互いに学び合い、支え合う仲間として、令和7年度も活動できることを願っています。

(札幌市立平岡緑中学校・校長)

第72回 全国中学校理科教育研究会 北海道大会

第63回 北海道中学校理科教育研究会 札幌大会

研究主題 「理科の見方・考え方を働かせて資質・能力を育み、豊かな未来を切り拓く理科教育」

大会主題 「学びの再構築を通して、自然との共生に向かう理科教育」

【開催期日】 令和7年8月6日(水)～8日(金)

【開催会場】 札幌市教育文化会館・ホテルライフオー・札幌

【参加申し込み】 https://www.dochuri.org/hokkaido_2025_portal/

＝＝＝＝＝分科会発表のポイント紹介＝＝＝＝＝

第1分科会 教育課程

自らの学びを再構築し、
科学的に探究する資質・能力を育む教育課程

◆北海道ブロック

「小中の学びの系統性と児童生徒の発達段階を意識した授業作り」

～理科の見方・考え方や学びのつながりを活かして～

標茶町立虹別中学校 藤村 琉奈

近年、少子化に伴う義務教育学校の開設が進み、小中連携を視野に入れた授業の必要性が高まっている。そんな中で「中1ギャップ」を克服できずに生徒指導上の問題に発展する生徒を目の当たりにしてきた。そのため、授業アンケートの結果をもとに小中での理科の学習を滑らかにつなげられるような授業改善を行った。今回は「静電気・電子」に関わる内容で、文部科学省「小中一貫した教育課程の編成・実施に関わる手引き」の教育課程の活用に記載されている、学習内容を前倒しにする授業を行った。その授業を受けた生徒は既習内容と新たに学習する内容のつながりを実感しながら授業に参加することができたという成果につながった。

◆東北ブロック

「科学的に探究する力を育てる理科教育」

～見通しをもって取り組む観察、実験を通して～

仙台市立宮城野中学校 熊谷 綾

自ら学ぶ意欲をもって科学的に探究するためには、生徒が自然事象に対する気付きから課題を設定し、それに対する仮説を立て、見通しをもって

観察、実験に向かうことが重要である。見通しをもつことで、観察、実験は課題を解決するための主体的な活動となり、探究が更に深まっていくと考えた。理科の授業改善を通じて、生徒が見通しをもって観察や実験に取り組むことで、科学的に探究する力を育む研究を行った。見通しをもたせるために、仮説が正しい場合の結果を予想させ、予想と結果が合致しているかを振り返らせた。見通しをもって実験に向かうことで、目的意識をもって実験に取り組むことができ、探究活動に主体的に取り組む姿が見られるようになった。

◆関東・甲信越ブロック

「自らの学習を調整し、学びを生かそうとする生徒の育成」

～中学校第2学年「天気とその変化」における
単元内自由進度学習において～

鉾田市立鉾田北中学校 秋山 みゆき

本研究は、単元内自由進度学習を取り入れた探究的な学習を展開することで、自らの学習を調整し、学びを生かそうとする生徒を育成することをねらいとした。必要な学習時間や自分に合った学び方などを理解することが、適切に学習を調整しながら学習を進めたり、学んだことを生かそうとしたりすることにつながると考えた。そのために、自己調整をしながら学習を進めることができる学習計画表の作成や、学習方法・学習形態の選択、自己の学びを実感できる振り返りシート、理解を深め、探究心を高める関連器具の設置を行った。

成果として、単元内自由進度学習を取り入れた探究的な学習を展開したことで、粘り強く課題に取り組んだり、自らの学びを深めたりする姿が見られるなど、自らの学習を調整し、学びを生かそうとすることにつながった。

◆東京ブロック

「電池分野における粒子モデルの理解を深める単元構成の工夫」

～金属箔を利用した実験教材と探究の過程を繰り返す学習活動を通して～

東京学芸大学附属竹早中学校
(元東京都文京区立第十中学校) 北田 健

中学3年「化学変化とイオン」の単元において、厚さ0.01mmの金属箔を用いた金属箔ダニエル電池および銀樹の実験を開発した。その上で探究の過程を複数回組み込んだ単元計画を立案し、粒子モデルを用いて思考する場面を意図的に設定した。電極の変化を視覚的に捉えさせることで、生徒が根拠に基づいて粒子モデルを構築していく姿が見られた。さらに、思考の記録や可視化をICTで支援し、デジタルモデルを共有することで、生徒は他者の視点を取り入れながら、自らのモデルを改善する学習を進めることができた。記述分析や他校との比較調査からも、単元内で探究の過程を繰り返していく中で、生徒が自ら粒子モデルの理解を深めていけることが分かった。

◆中部ブロック

「理科の見方・考え方を働かせ、自然の事物・現象を科学的に探究するための授業実践」

～中学1年「光の世界」の事例から単元を貫く問いの設定～

滑川市立滑川中学校 魚住 広太

本研究では、単元を貫く問いを設定し、その問いを追究するためのカリキュラムを編成した。その研究成果と課題を出すために、次のような実践を行った。

1学年4学級を対象に「光の世界」の単元で全12時間の授業実践を行った。導入では、光やレンズの働きを使った道具にはどのような特徴があるのだろうかという課題(大課題)を設定し、その特徴を調べた。そして、光の直進、反射、屈折の5つの課題(小課題)について、身近にあるものや実生活で使われているものを使用して課題を解決した。

授業実践の成果と課題から、今後は「光の世界」の単元以外でも実践できるカリキュラムを開発・編成し、より質の高い理科授業を模索していくことが求められる。また、生徒の学習支援ソフトを活用する場面を増やし、学習の一助となるよう工夫していく必要がある。

◆中国・四国ブロック

「学習の振り返りを取り入れ、深い学びへとつながる教育課程の工夫について」

～OPPシートの実践を通して～

萩市立三見小中学校 森 泰一
周南市立岐陽中学校 平床 尚貴

自分の学びへの達成感を得たり、学習状況を捉えたりすることができるようにし、子どもたちが深い学びへとつなげるために、理科の授業において、全単元についてOPPシートを作成し、毎時間の振り返りと単元ごとの振り返りを取り入れる実践を行った。

アンケートの結果からOPPシートを使用して、継続的に振り返りを行うことによって、日常生活と理科とのかかわりについて考えることや授業で学んだことをさらに深めることなど、深い学びにつながっていることがわかった。

第2分科会 学習・評価

理科の見方・考え方を働かせ、
自らの学びを再構築する学習指導と学習評価

◆北海道ブロック

「生徒の資質・能力を育む学習指導と学習評価の工夫」

函館市立巴中学校 片桐 尚哉

私の所属する函館市中学校理科教育研究会では、明確化された資質・能力を育むために重視すべき学習課程のイメージ「探究の過程」と学習をデザインするために教師に必要とされる事項(指導計画・指導・評価・改善)の両方を合わせたものを「学びの過程」とし、研究を進めている。

教師が育成すべき資質・能力をしっかりと把握し、「学びの過程」の中で、生徒にとって主体的・対話的な学びとなるように指導計画や教材・教具、観察・実験、学習評価等を工夫することで生徒の学習意欲が喚起・持続され、個々の学習を深めることができるのではないかと考え、研究を進めた。

◆関東・甲信越ブロック

『自らの学習を調整しようとする側面』の記述分析による評価」

～第2学年「消化」の学習を事例として～

蕨崎市立蕨崎東中学校 益田 文教

本研究では、「自らの学習を調整しようとする側面」の評価及び指導方法について探究することを目指した。ワークシートに記述された生徒の振り返りを対象とし、それぞれの文の意味内容に注目して小・大カテゴリーを設定した。そして、メタ認知との対応について考察を行った。メタ認知に相当する記述は認められたものの、具体性は低や中が多い傾向がみられた。また、具体性に欠ける記述は学習調整に結びつかない可能性があるため、状況に応じた指導が必要であると判断した。指導には、メタ認知を促すような働きかけ、メタ認知的活動につなげる働きかけ、メタ認知的モニタリングとメタ認知的コントロールが往還する働

きかけを行うことが考えられた。

◆東京ブロック

「個別最適な学びの実現に向けた指導の工夫」

～ワンルーム習熟度別授業～

府中市立府中第五中学校 若木 洋
豊島区立明豊中学校 松本 和記

ワンルーム習熟度別授業とは、一つの教室でそれぞれの理解度をもとに学習活動や課題を生徒に選択させて行う授業形態である。教員は支援が必要な生徒に、より重点的な指導を行うとともに、特性や学習進度などに応じた指導方法・教材等を柔軟に提供・設定する。また、生徒の興味・関心に応じ、一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供する。

検証授業では、講義形式や演習形式、実験など様々な場面や多様な単元においてワンルーム習熟度別授業を実践した。生徒はより主体的に学習に取り組む態度がみられ、基礎的・基本的な知識の定着を図ることができた。本研究の成果が、個別最適な学びの実現に向けた実践の一助となることを期待する。

◆近畿ブロック

「主体的に学習に取り組む態度を育成する授業展開」

平群町立平群中学校 島田 郁恵

本校は、教科を越え学校全体の活動を通して主体的に行動する生徒像を目指している。さらに、学校の目標の中には、「次世代の担い手として必要な力」の育成があり、日々の授業づくりの際にもキャリア教育を意識して指導している。

また、難しくても新しいことに挑戦したいと思っている生徒が多く、理科の授業の中でも、課題の難易度が高いほど、積極性を感じられることが多かった。

こうした生徒の興味を最大限に引き立てる授業展開を思考し、生徒の生き方の糧になるような理科授業を考え、評価においても生徒の向上心が高まる方法を思考した。

◆九州ブロック

「理科の見方・考え方を働かせて資質・能力を育み、豊かな未来を切り拓く理科教育」

～理科を学ぶ有用性を感じる授業づくりと評価～

日南市立榎原中学校 田中 絢悟

「理科を学ぶ意義とは何か。」本研究では、理科を学ぶ原点に戻り、探究的な活動をとおして理科の楽しさや有用性を、生徒自身に感じとってほしいと考えました。そのために、単元ごとに、日常

生活や地域との関連をもたせた「解きたくなる単元を貫く学習課題」を与えるとともに、課題解決に必要な「覚えるべき内容やポイント」を生徒に示しました。これらの具体が、本地区独自で作成した「振り返りシート」と「単元テスト」です。これらを用いて、生徒の学習前と学習後の変容を評価に活かした事例を紹介します。

◆私立・国立ブロック

「自己調整力の向上を目指した学習指導と学習評価の工夫」

～1人1台端末による学習履歴の蓄積と活用～

北海道教育大学附属函館中学校 木村 勇太

近年、生徒が「自らの学びを調節する力」や「粘り強く学習に取り組む態度の育成」が重要視されている。本研究では、1人1台端末を活用して生徒が自ら学習履歴を蓄積・活用し、自分の学びを主体的に振り返りながら改善できる生徒の育成を目指した。

「電流の性質」では、毎時間の振り返りシートを通じて理解や疑問を記録させ、コメント機能による個別のフィードバックや困り感の全体共有を通して、学びの深まりを図った。「生物の体をつくるもの」では、Google サイト上に教材や映像を集約し、生徒が自ら学習手段を選択できる環境を整備した。CBT やルーブリックを活用することで、目的意識をもって学ぶ姿が見られた。成果として、自身の変容に気づき、学びを主体的に調整する姿が見られた。

第3分科会 観察・実験

自らの学びを構想し、
科学的に探究することができる観察・実験

◆北海道ブロック

「生徒の思考を広げ、『学びの再構築』につながる観察・実験の工夫」

～「知識の再構築」につながる観察・実験～

札幌市立明園中学校 芳賀 大二郎

本研究では、「学びの再構築」の中でも特に「知識の再構築」に重点を置き、観察・実験を通して「知識の再構築」につながる要素を明らかにする実践を行った。構想の場面で生徒の思考が広がる教材の工夫や、継続したりフレキシションの活用によって、「知識の再構築」が行われると考えた。2 学年生命領域では、身のまわりの食材を教材として消化酵素のはたらきを調べる実践を行った。2 学年エネルギー領域では、手作りの小麦粘土を

教材として、電気抵抗及び合成抵抗の概念を身に付ける実践を行った。これらの実践から、「知識の再構築」につながる要素が明らかになり、「学びの再構築」が進むことで「知識の概念的な理解」につながることもわかってきた。

◆東北ブロック

「日常生活から見いだした課題をもとに科学的に探究する観察・実験について」

相馬市立中村第一中学校 渡部 兼介

令和6年度福島県中学校教育研究会理科部会では、研究主題「科学的に探究する学習活動を通して、未来を創造するための資質・能力を育成する指導はどうすればよいか」、副主題「日常生活や社会との関連から見いだした課題を探究し、学んだことを自己や地域に生かそうとする学習活動の工夫」として研究を進め、その中で「福島ならではの」の教育を進めてきた。

実践より、「福島ならではの」の材料や課題、生徒の身近なものを使った実験は生徒が日常経験から疑問や自分の考えを抱きやすいものであり、興味・関心を高めたまま探究することができていた。地域産物を教材として扱う観察・実験は主体的な探究に一定の効果がみられた。理科で学んだ内容を地域に生かし、さらには身の回りの事象を地球規模に広げていく姿勢、意識を育む授業の実現を図っていきたい。

◆近畿ブロック

「科学的に探究する力を育むための観察実験教材教具の紹介動画の作成」

大津市立北大路中学校 池内 伸圭

本研究では、中学校理科授業で使える教材教具を教員に紹介するための「教材教具紹介動画」を作成することとした。それらの動画はYouTube等の動画共有サービスにアップロードすることで、利用者が紹介動画の中から自分に必要な動画を選択して活用できることを想定している。動画構成をできるだけ簡潔にし、ポイントが視聴者に伝わるようなものになるように配慮した。同時に作成者にとっても負担の少ない方法で作成できるフォーマットにすることとした。

実際に完成した動画を、研究授業で使用する教材探しに使ってもらおうと「今回は紹介教材を改良して授業に用いた。動画で紹介されていることで、自分の求めている教材かどうかの判断が一目でできた上に、生徒に見せたいポイントをアレンジとしてその教材に加えやすいと感じた」という感想をいただいた。

◆中国・四国ブロック

「観察・実験を通して、価値的興味を深めるアプローチの工夫」

福山市立駅家中学校 井上 大輔

本校の実態調査アンケートにより、「理科という学問を深めたいか」への肯定的評価が低いことが判明した。これは、理科に対して日常生活での事物現象との関連や興味関心が浅いことを示唆しており、理科教育の本質である「科学的に探究する力」の育成につながりにくい状況にあると考えられる。そこで本実践では、より深い学びにつながる「価値的興味」を育むことを目的とし、観察・実験を通じた4つのアプローチを考案し授業で実践した。生徒の記述やアンケートを通じて、その効果を検証したところ、理科の学びに対する内発的動機づけの高まりや、自分ごととして捉える姿勢の変化が見られ、一定の成果が確認された。

◆九州ブロック

「自分らしく理科を創造し、科学的に探究することができる観察・実験」

～単元計画と振り返りを往還する活動を通して～

福岡県教育庁京築教育事務所 教育相談室
(在籍：行橋市立行橋中学校) 古森 亮太

急激に変化する時代の中で、生徒たちが自分らしく生きていくために、理科の学習はどのように関わるのかを模索して実践を続けてきた。そこで、学びの文脈のある単元計画のもと、ゴールを目指しながら学習を積み上げ、学習内容を働かせて検証実験を行う姿を、自分らしく理科を創造する姿として、実践のテーマとした。主役である子どもたちの学びの案内人として、科学的に探究することができる観察・実験をともに創ろうと考えた。研究のねらいのキーワードを、①子どもたちの学習に寄り添った単元マップと振り返りの往還、②子どもの気付きに基づく、実生活に沿ったよりリアルな課題の設定とし、その有効性を明らかにしたいと考えた。

◆私立・国立ブロック

「自立して探究する生徒の育成」

～科学的根拠に基づいたアーギュメントの効果に関わる研究～

北海道教育大学附属旭川中学校 林 亮輔

本研究では、生徒が他者と協働して学ぶことを通して、科学的根拠に基づき、かつ論理的に表現する力を育成させることを目指すために、アーギュメントに焦点を当て、その効果について検証

した。

実践は、第1学年の「身の周りの物質」で行った。特にアーギュメントの効果を生徒の発言内容から見取りやすい授業に焦点を当て、生徒の探究の様子に基づいて研究発表を行う。具体的には、見た目だけでは判別ができない物体がどのような物質でできているかを特定する学習を取り上げる。生徒が物質の密度に着目して、2種類の水溶液を活用して層をつくり、層の間に物体を留まらせることで、物質名を特定する探究活動からアーギュメントの効果について検証する。

第4分科会 環境教育

自然を多面的・総合的に捉え、
自然との共生に向かう環境教育

◆北海道ブロック

「持続可能な社会を創造する生徒を育む環境教育」
～生徒主体の環境調査を通して見えてくるもの～

旭川市立永山中学校 田中 秀平

本実践は、生徒主体の環境調査を主軸とし、自立した科学的探究活動を通して、身の回りの自然を多面的・総合的に捉える力を養い、持続可能な社会の創造や自然との共生に必要な資質・能力を育むことを目指している。

大気の汚れや生物の分布、河川の水質調査の方法等について生徒自身が主体的に調べ、予想を立て、調査結果の分析、考察、振り返りやレポートの作成を行った。

成果として、生徒自身が課題解決に向けて、成長実感のともなう自立した科学的探究活動を実現することができた。また、生徒のレポートからも、「量的・関係的な見方」や、「時間的・空間的な見方」など、これまでに培ってきた理科の見方・考え方を十分に働かせながら探究活動を進められ、より深い確かな学びの一助になったものと考えられる。

◆東北ブロック

「中学校3年間における環境教育の充実」

～SHEL学習やエコ委員会などの活動を通して～

盛岡市立下橋中学校 長坂 雄斗

本校では「総合的な学習の時間」を「SHEL学習」と名づけ、20年以上にわたり環境教育に取り組んでいる。各学年では、森林や川の体験学習、ごみ処理施設の見学、植樹体験などを通して、自然と人間の関わりや持続可能な社会の実現について学んでいる。また、エコ委員会が中心となり、

校内での節電・募金活動、エコ学習会の開催など、主体的な環境保全活動を行っている。理科の授業では、3年間の学びをレポートにまとめ、日常生活での実践に結び付けている。アンケートでは、94.2%の生徒が環境問題への意識が高まったと回答し、多くの生徒が今後も環境を意識した生活を続けたいと述べている。今後もこのような学びを継続し、環境への理解を深める教育の推進が期待される。

◆中部ブロック

「自然との共生に向かう子どもを育む教師集団をつくる」

～理科の見方・考え方を働かせて豊かな未来を切り拓く理科教育～

福井市足羽第一中学校 稲田 竜一
福井大学教育学部附属義務教育学校 後期課程
佐々木 庸介

理科教育を通して、環境教育に取り組むためにはどのように授業を構築するべきか。福井県の福井ブロックでは、学習指導研究部会と観察・実験研究部会という探究する教師集団からそのアプローチを続けている。その根底として、学びの相似形のように、私たち教師集団の学びが生徒の学びに浸透していくことが重要である。

本研究では、2つの部会での取組をもとに、自然との共生に向かう環境教育を実践している。身近な問題に対して、生徒自身が課題を見いだして解決していくプロセスの中で、未知の問題を解決していくために必要な知識を学んでいくという姿につながっている。今後も引き続き、豊かな故郷×学ぶ教員集団を続けていく。

◆近畿ブロック

「南海トラフ巨大地震に備えるために」

～身近な場所の岩石から大地の成り立ちを考える～

田辺市立秋津川中学校 庄口 和宏

南海トラフ巨大地震が30年以内に起こる確率は70%と言われている。迫り来る自然災害に対応していくためにも、地学教育の重要性は高まってきていると感じている。

地学の観察や実験は手間がかかり、地域によっては地層の観察などは困難である。そこで今回は、身近にある小さな岩石やクッキーなどを使って大地の成り立ちを考える授業を、和歌山県立自然史博物館の小泉奈緒子学芸員と共に考えた。

授業は3時間に分けて行った。

- ① 岩石から大地の成り立ちを考える。
- ② 地震のメカニズムを理解する。
- ③ 学校周辺の地質について調べる。

授業を通して、生徒の地質に対する理解を深めるだけでなく、自然災害から身を守るための思考力を養うことを目的としている。

◆九州ブロック

「西中学校林の取り組み『100年の森プロジェクト』」
～「100年続く森」を目指した保全活動と生きた
学びを行う探究活動の場としての活用実践～
白杵市立西中学校 柴田 隼

本校の卒業生や関係した教師を中心とした「学校林を守り育てる会」の取り組みを、生徒会活動をきっかけとして、探究的な活動を実施できる「学習の場」としての活用実践についての報告。総合的な学習の時間を中心として、現地の動植物の調査や植樹や間伐などの自然体験を行ったり、学校林の今後の活用方法を企画・検討したりするなど、100年続く森をキーワードとして、環境保全を学ぶ貴重な場として活用している。実際に害獣対策や植樹活動などの他に、地域に根付いた、地域で見守る場所として、もっと多くの人に認知してもらうための広報活動を、生徒が主体となって実践している。

◆私立・国立ブロック

「生態系を多面的・総合的に捉える授業実践」
～「エコカラム」による生態系理解の深化を目指して～
北海道教育大学附属札幌中学校 室永 瑞貴

本研究は、「持続可能な生態系の構築」を学習課題とし、生徒が自然を多面的・総合的に捉える力を育む授業実践である。SDGs やバイオスフィ

ア2の事例を導入とし、生徒は仮説を立ててエコカラムを設計・構築した。その後、学級全体で一つの生態系モデルを観察し、気づきや疑問を対話的に共有することで、自然のつながりを主体的に考察した。基礎知識の習得と並行して設計に取り組んだことや、経過観察を通して設計の意図と結果を照らし合わせたことにより、学びは深まった。結果として、生徒は自らの考えが生態系に与える影響を実感し、自然との共生に向けた視点を養うことができた。

《大会参加・教育視察や宿泊の申し込み先》

名鉄観光サービス株式会社札幌支店

〒060-0003 中央区北三条西1丁目1-1

札幌ブリックキューブ6階

TEL：011-241-4986 FAX：011-241-0154

メール 担当：大房 shuji.ofusa@mwt.co.jp

二次元バーコードもご利用ください



道中理では現在、DX化を推進しています。二次元バーコードを読み取ることで、全国大会の情報を簡単に入手できるようになりました。ぜひご活用ください。



令和7年度「道中理」理事会・事務局総会報告

4月26日、令和7年度の道中理常任理事会・理事会・事務局総会が、ホテルライフオー・札幌で開催されました。会では令和7年度の事業計画・各部活動計画・予算案について審議され、原案通り承認され、役員の選出、理事・事務局員の委嘱が行われ、今年8月の第72回全中理北海道大会の運営についても確認されました。

令和7年度 役員、理事、事務局員

会 長	古川恵美子（札幌市立平岡緑中学校校長）	新	事務局長	野田 隆之（札幌市立北都中学校校長）	再
副 会 長	小嶋 栄次（旭川市立永山中学校校長）	新	次 長	渋谷 啓一（札幌市立厚別南中学校教頭）	再
副 会 長	阿部 真之（函館市立巴中学校校長）	新	次 長	中村 英之（札幌市立啓明中学校教頭）	再
副 会 長	森下 智之（釧路市立阿寒中学校校長）	新	次 長	小路 美和（札幌市立新川中学校教頭）	再
副 会 長	林 康弘（札幌市立東月寒中学校校長）	再	庶務部長	平林 拓磨（札幌市立あいの里東中学校教諭）	新
副 会 長	熊谷 誠二（札幌市立西野中学校校長）	再	会計部長	長沼 文博（札幌市立陵北中学校教諭）	再
副 会 長	三浦 英悟（札幌市立栄中学校校長）	再	組織部長	戸田 賢之（札幌市立平岡中央中学校教諭）	再
旭川地区事務局長	進藤 貴史（旭川市立広陵中学校教頭）	再	編集部長	田口 佑弥（札幌市立向陵中学校教諭）	再
函館地区事務局長	高野 克（函館市立深堀中学校教頭）	再	研究部長	伊藤 雄一（札幌市立北陽中学校教頭）	再
釧路地区事務局長	岩谷 拓実（釧路町立昆布森中学校校長）	再			
会計監査	阿部広一郎（札幌市立厚別中学校校長）	再			
会計監査	豊村 和史（札幌市立星置中学校校長）	再			

顧問 108名 常任理事 15名 理事 32名

●4月26日(土)、ホテルライフオー・札幌を会場に行われた道中理常任理事会・理事会・事務局総会において、新会長として札幌市立平岡緑中学校の古川 恵美子校長が選出されるとともに、役員や事務局員が承認されました(詳細は前ページ参照)。今年度は、教育のDX化を受けて、道中理にも事務局長付に「DX推進室」を位置付け、道中理ホームページ・Slackの運用、その他ICT、DXに関することを担当することとしました。また、令和7年度の事業計画と予算案についても承認され、本年度の道中理の活動がスタートしました。

●8月6日(水)～8日(金)、札幌市教育文化会館を主会場に、第72回全国中学校理科教育研究大会北海道大会兼第63回道中理札幌大会を開催します。全国各地から4つの分科会で合計24の実践発表が行われます。文部科学省講演には、小林 一人教科調査官並びに神 孝幸学力調査官をお招きし、「豊かな未来を切り拓く理科教育」と題した御講演をいただきます。また、学術講演は、京

都大学物理学准教授の榎戸 輝揚先生をお招きし、「触れる科学でつなぐ次世代への学術研究と理科教育」と題した御講演をいただきます。榎戸先生は札幌市立中学校を卒業しており、生徒の時には札幌市中文連「私たちの科学研究発表会」で発表したことのある方で、時空と立場を超えたつながりとなります。

●北海道大会の特徴の一つである「若い理科教師の集い」は6日夕刻から開催します。道内の若手理科教師が中心となり、全国の若手理科教師同士の交流を図ります。また、7日の昼には中学生による科学研究発表を予定しています。

●大会運営にはたくさんの人手が必要です。「北海道大会に来てよかった」「大会運営に参画できてよかった」と誰もが感じられるような大会となるよう、オール北海道、チーム道中理として皆様のお力をお貸しください。よろしくお願いいたします。



教育出版は、無限の可能性を秘めた
「学びのチカラ」を教科書という形で
世に送り出し、子どもたちの成長に
貢献してきました。

これからは学びの「場と機会」を、
家庭へ、地域へ、さらに社会へと
広げていきます。

学びのチカラで「自ら問い、考え続け、
行動し、社会を創っていく人」の成長を
支えながら未来へとつないでいく。

そのような、次代の教育をリードする
企業でありたいと考えます。



教育出版ホームページ <https://www.kyoiku-shuppan.co.jp/>

〈北海道支社〉〒060-0001 札幌市中央区北1条西7丁目 プレスト1・7 2F TEL:011-231-3445

〈函館営業所〉〒040-0011 函館市本町6-7 函館第一ビルディング 3F TEL:0138-51-0886

令和7(2025)年7月2日 道中理 192号
編集発行 北海道中学校理科教育研究会
会 長 古川 恵美子(札幌市立平岡緑中学校校長)

事務局所在 〒003-0869
札幌市白石区川下749
札幌市立北都中学校内
事務局長 野田 隆之(校長)
TEL 011-872-5201 FAX 011-872-4596
<http://www.dochuri.org/>